

イソザキアラタの「建築の解体」の来歴と成果 —1960～1970年半ばまでの彼自身の言説を資料として—

岡島直方

緑地環境情報学研究室

2007年11月4日受付; 2008年1月29日受理

**Isozaki and Disassembling Architecture
Concepts in his writing from the 1960s to the mid-1970s**

Naokata Okajima

*Laboratory of Green Space and Environmental Information,
Minami Kyusyu University, Takanabe,
Miyazaki 884-0003, Japan*

Received November 4, 2007; Accepted January 29, 2008

This study looks closely at one of the architectural concepts created by Arata Isozaki, who has gained international credit as a prominent contemporary Japanese architect and also has a powerful influence on next-generation creators. In particular, the report examines one of his books, *Kenchiku no Kaitai (Disassembling of Architecture)*, in which he presented his own ideas to the society about architecture in his relatively initial stage of creation, for clarifying the processes he underwent in his pursuit of the concept from the 1960s to the 1970s. The following three books published by Kajima Institute Publishing Co., Ltd. were surveyed for this exploration: *Kukan-e (Space)*, *Disassembling of Architecture* and *Shuhou-ga (Technique)*. The survey extracted the term *disassembling*, its synonyms and other conceptual terms from these books in an effort to organize the context in which the terms are mentioned and the years in which the terms began to be used.

As a result of these examinations, we discovered that Isozaki had not intended to disassemble architecture from the beginning but had used the word *disassemble* to gain an appropriate understanding of modern paintings and city environments and subsequently put the concept to use for urban design methodology. Based on these ideas, from around 1968 Isozaki began to look at architecture from the perspective of disassembling architecture. In *Disassembling of Architecture*, he introduces overseas architects and presents such expressions as irony, black humor, parody and nonsense as concrete concepts for disassembling architecture. These concepts became critical values for his subsequent creative life.

Key words: Arata Isozaki, architecture, urban design, *Kenchiku-no-Kaitai*, *Disassembling Architecture*, vocabulary.

研究の目的

本論においては、日本を代表する現代建築家として国際的な評価を得、また後進の建築家にも多大な影響を与えている磯崎新について、特に彼が作家としての活動を始めた比較的初期の頃に社会に言論活動として問いかけた「建築の解体」について考察する。「建築の解体」は1975年に美術出版社から出された単行本の書籍タイトルである。この概念を1960～1970年代半ば

までにおいて磯崎がどのような経過をたどって展開し、どんな意義があったのかを明らかにすることを目的とする。現時点において活動を続けている作家に関してこのような試みを行うことは無謀かもしれない。しかし、磯崎が建築界の枠に縛られることなく、美術や文学といった、以前は他分野として捉えられていた領域に出入りをしながら様々な活動を行ったことは建築の可能性を広げることに大いに貢献してきたといっても過言ではない。その中でも初期の頃彼が提示したこのコンセプトは彼の活動全体の中でも大きな転機と

なったものであり、その部分の価値は揺らぐことがないと思われるので、同テーマについての調査、考察することには一定の意義があると考えらる。

研究の方法

このテーマの考究において、磯崎の言論活動のすべてを参照することは望ましいことであるが、本論では調査対象をしぼって整理することにする。ここでは、磯崎の著作集として鹿島出版会から出版された3冊の本をテキストとする。本論は生身の磯崎がどのような人間であったかということに肉薄するのではなく、あくまでも言説というメディアを通じて浮かび上がってくる彼の姿を観察してまとめることにある。メディアが作り出したイメージの枠から磯崎像を確認する作業である。そのため、以降この作家について扱う際には彼の名前の表記をイソザキとする。ここで選んだ3冊のテキストは、9冊シリーズの前半3冊部分（2007年現在）である。これら9冊は製本のスタイルが統一されているため、一般読者にとってもその存在を識別しやすいまとまりを構成している。今回対象としたシリーズとは以下のものである。（ ）内にはその単行本としての履歴を記した。今回の調査に用いた文献の出版年には下線を付した。

テキスト1：空間へ（1972美術出版→1984同→1997鹿島出版会）

テキスト1：建築の解体（1975美術出版→1984同→1997鹿島出版会）

テキスト3：手法が（1979美術出版→1997鹿島出版会）

既に述べたようにこれ以降も言説が発表されて鹿島出版のシリーズは続くのだが、本論のテーマとする1960年代から1970年代半ばまでの時期のものは、テキスト3までに収められているので、この3冊の内容に絞ることとしている。調査は、便宜上テキスト1からテキスト3へ順番に沿って行い、各テキスト内部においても、1ページから順番に終わりのページへと進めていくことにしたが、最後にまとめる際には調査の内容を年代順に並べて考察するのが妥当と考えた。

以上のテキストを使ってどのように調査を進めるかを以下にまとめる。

- (1) 「解体」という言葉を用いている文章を抜粋する。
- (2) 直接に「解体」という語を用いているところだけではなく、その類義語や頻出する他の言葉で新しく登場した言葉も抜粋する。
- (3) (1) (2) を踏まえて、彼が何に注目しているのかを前後の文脈から探る。また彼の関心が時間を経るごとにどのように変化していったかを探る。
- (4) 解体について直接述べていない文章であってもテ

表1. テキスト1において「解体」という言葉が使用されている文脈

整理番号	内 容	出展	初出年次	解体分野
1	「ルネッサンスの単一の視点を持つ空間から、その空間を解体しながら再構成を試み続けてきた近代絵画は（この問題は建築の空間についても十分に適応できると考えられる。）やはりキャンパスに立ちむかうひとつの作者の視点を失うことはなかった。」→「現代都市における空間の性格」の文中より抜粋。	p.43	1962.02	近代絵画 建築に適応可能と ()の中で言及
2	「このようなオープンプランニングを通じてみられる特徴は、解体し、分解した建築を将棋のコマのように配列することに重点が置かれる。それは、近代絵画が解体した対象をふたたびキャンパスの上で再構成しようとするのに似ている。その空間の捉えかたはまったく同一の意識に基づいているといってもよい。解体と構成のひとつの視点に基づいて進行させるという点では、その区別をつけることは不可能である。」→「現代都市における空間の性格」の文中より抜粋。	p.46	1962.02	都市計画 近代絵画
3	「それゆえに私たちのあらゆる総合への企画も、常に解体の危機にさらされているのだが、その総合への投企のみが、論理の存在を証明し、方法の有効性を確認させることにもなるのである。都市デザインがひとつの人間の総合的な環境形成の方法であるとしても、その総合が完成したときに、方法は解体の契機を内在するだろう。それにもかかわらず、都市デザインは、建築と都市計画の分解した間隙をぬって発生し、いまやそのような両者の分類を解体しかねない媒体へと成長しつつあるといえよう。」→「都市デザインの手法」の文中より抜粋。	p.88	1962.02	総合への試み
4	「そういう都市生活の象徴的空間であったもの（広場のこと、筆者加筆）が、いま解体され、部品化しているという点には驚くにはあたるまい。」→「イタリアの広場」の文中より抜粋。	p.238	1965.01	都市の広場
5	「実は、そのとき現実の都市は解体を開始しようとしていた。都市をそっくり、囲い込んでいた中世的形態が、人口の増加と集中によって徐々にくずれつつあった。」→「イタリアの広場」の文中より抜粋。	p.254	1965.01	都 市
6	「それ故、ここでは、いったん都市デザインの現状のパースペクティヴを描いてみて、そのなかでスコピエ計画の諸提案を解体して位置づけを踏むことにする。」スコピエ計画の解剖の文中より抜粋。	p.342	1967.04	スコピエ計画 都市計画

表1. —続き—

7	「そこで設計の作業過程におけるそれらの胎生的再現という着想もあったのだがそれをさらに類推しもういっぺん解体して、それぞれのコトバが表現する意味が対置され、設計仮説のような図式をつくらうとしているという誤解をまねいたことである。」→スコピエ計画の解剖の文中より抜粋。	p.346	1967.04	都市設計の 計画方法概念
8	「ここでは、主要な方法として、すべてが可能なかぎりエレメントに解体される。そのエレメント構成もしくは組織化がデザインの目標となるのである。」→スコピエ計画の解剖の文中より抜粋。	p.350	1967.04	都市デザイン
9	「実はこの組織化論には、すべての方法とも関連する基本的命題がふくまれている。個を集団化する契機についての考察である。都市内に解体されて存在する個が、集合化し更には組織化されて集団化しうるか。おそらく、それは要素に還元されたもの自体の探求が中心になるだろう。そして還元され解体された要素の集合に対するイメージも、単に作家の手から生まれるパターンでなくて、論理化された集合論の形態をとるかもしれない。」→「スコピエ計画の解剖」の文中より抜粋。	p.351	1967.04	都市デザイン
10	「都心が放棄され、解体して、形態的なまとまりはどこにもない。」→「見えない都市」の文中より抜粋。	p.376	1967.11	ロサンゼルス の都心
11	「そこに見られる白井晟一の建築手法は、客観化された諸要素の系に建築の基本構成をゆだねてしまう方法とは完全に訣別している。建築をその構成要素に解体して、それを対象に応じて再構成するという方法が、現代建築の部分を支えているのだが、実はこのような手法は、様式論的な建築を一般化したボザールの手法へ凍結したものだ。」→「《晟一好み》の成立と現代建築のなかでのマネーリスティック発想の意味」の文中より抜粋。	p.404	1968.2	建 築
12	「建築にとって、その構成素材が石やコンクリートのように、多量で安価な供給の出来るものにたよらなければならない時代にあつては、建築物を運び、組み立て、解体することは、至難の技であった。いまはむしろエンジン・ドライブのさまざまな車体が用意されている。」→「軽量で、可搬的なものたちの侵略」の文中より抜粋。	p.451	1968	建 築
13	「都市を解体に導く技術的な条件を組織化することが、おそらく今後の都市をデザインするうえで基本的な発想になることは必然的だと思われるのだが、……」→「軽量で、可搬的なものたちの侵略」の文中より抜粋。	p.451	1968	都 市
14	「建築の内部が、ポスターによって変質し、衣装もまた変えられる。当然のことながら家具もその意味を変えつつある。家具は巨大化し、あるいは解体してあらゆる手がかりになる床、壁、天井にとび切り、はねまわり、ついには自ら巨大化して、室内の空間をひとりじめし、二階建てとなり、メカニカルな部分が結合することによってロボットのように自在な応答を可能にしようとしている。」→「軽量で、可搬的なものたちの侵略」の文中より抜粋。	p.454	1968	家 具 家具のポスター
15	「(グラフィカルな色彩やパターンは)…床、壁、天井といったソリッドな、建築の要素的な部分の論理とは無縁に、色彩を発生させる。それは内部空間において、色彩自体の存在に市民権を与え、同時に、すべての物質を表皮だけの意味に解体してしまった。」→「軽量で、可搬的なものたちの侵略」の文中より抜粋。	p.455	1968	スーパーグラフィック その色彩やパターン
16	「建築や都市がテクノロジー的な要素の進出によって、みずから解体をせまられているときに、グラフィックがこぢんまりと四角い枠のなかにおさまることもあるまい。」→「軽量で、可搬的なものたちの侵略」の文中より抜粋。	p.456	1968	建 築 都 市

キストはすべて目を通し気がついたことを記録し
考察で取り上げる。

整理番号4~10. 整理番号11, 12, 16においては建築
の解体がテーマになっている. また14においては家具
の解体について述べている. 15においてはすべての物

調査結果

(1) テキスト1

テキスト1において、「解体」という言葉が用いられていた箇所は表1の通りである。この言葉が抽出された箇所は16箇所あった。解体という言葉の下に下線を付した。この中で絵画の解体について述べたものは整理番号1, 2である。都市の解体について述べたものが

表2. テキスト1に見られる「解体」に類する言葉

使われ方の違い	ボキャブラリー		
1	「破壊」 1962.9	「分解」 1962.1	
2	「消滅」 1962.9	「死滅」 1962.9	「消失」 1965.3
	「絶滅」 1965	「崩壊」 1962.9	「滅亡」 1962.9
3	「破局」 1963.9	「終末」 1963.3	

表3. テキスト1に見られる別の種類の言葉

分類	ボキャブラリー
1	「溶解」1962.1 「融解」1963.12 「流れ溶ける」1964.5
2	「廃墟」1960.9 「虚体」1964.5
3	「虚像」1962.9 「仮象」1963.10 「表象」1961.2
4	「流動」1963.3 「変動」1962.4 「変質」1965.8 「変革」1960.9 「変転」1963.3 「変貌」1963.3 「変形」1960.9 「変化」1960.9
5	「非実体的」1964 「抽象的」1962.9 「抽象化」1962.1 「非現実的」1962 「不確実」1967.4

表4. テキスト2で「解体」が用いられている文脈例

整理番号	内容	ページ
1	「建築の白紙還元という解体作業」→ホライの「非建築」、「不可視建築」、「メディアアーエンヴァイラメント」などの意味するものが何かを説明。	p.23
2	「規制の制度、デザイン、方法、システムを徹底的に解体に導こうとしている。ナンセンスは、このような攻撃にもっとも有効化する戦術でもある。」→アーキグラムの説明。	p.294
3	「近代建築の規範を解体し、建築の領域を拡張する作業」→磯崎自身と7人の作家たちの行っていることについて説明。	p.299
4	「<建築の解体>は、もっぱら、他領域との混淆、混在、あるいは衝突のあげくの変貌としてあらわれた、とみてもいい。すくなくとも、他領域言語との交換は、現代建築の表象に決定的な変化をもたらしたのである。」	p.312
5	「建築は、解体するだけでなく、その姿をも失ってしまうのだ。」	p.324

質についての解体について述べている。13と16は都市についての解体である。西暦で言えば、1962年には絵画と都市について、1965年から1967年までは都市、1968年からは建築、都市、家具、すべての物質などの解体となっていた。

「解体」という言葉に類似している表現を抽出したところ10個の単語が見つかった。それを文章に用いる際の使われ方の違いで整理したものが表2である。

「解体」という言葉に対して、表2のボキャブラリーほど直接的ではないがこの言葉がイメージする周縁の言葉を整理したものが表3である。読んでいて私が違和感を覚えた語群である。

(2) テキスト2

テキスト2において、「解体」という言葉が用いられていた箇所の実例は表4の通りである。5箇所見つけることができたがこのほかにもある。ただし、テキスト

表5. テキスト2の中で、磯崎が外国人建築家の作品説明に使った言葉

種類	ボキャブラリー	出現箇所	初版
1	アイロニー	p.218 L5	(6)p.125上L4
		p.3 L14	(1)p.98下L2
	アイロニカル	p.311 L12	(8)p.169 L1
		p.359,L17	(10)p.176 L1
2	ブラック・ユーモア	p.11 L14	(1)p.103上L15
		3	パロディー
p.65 L8	(2)p.174下L22		
p.263 L20			
p.286 L12			
		p.288 L9	
		p.292 L20	
		p.368 L2	(10)p.182 L2
4	パラドックス	p.218 L4,	(6)p.125上L21
		パラドキシカル	(6)p.125下L21
5	ジョーク	p.286 L12	
6	ナンセンス「反語的」	p.261 L1, L6	(7)p.185下L13
		p.288 L5,7	
		p.292 L20	
		p.294 L2	
7	否定	p.249 L14	

①～⑦はテキスト2における通し番号、～は、連載記事の番号を示す。

2は1975年版と1984年版の間で内容に相違点はなかったが、1997年版は原版と掲載内容に違いが見られる。言葉の抽出の際は、表4においては1997年版の書籍で行った。その後テキスト2に、それ以前のものに見られなかった新しいボキャブラリーが登場していたので、それを表5に整理した。表5のボキャブラリー抽出においては、1997年版に加え、その原典となった雑誌「美術手帖」の連載記事も直接調査し、そのデータについては「初版」の項目の中に記した。

(3) テキスト3以降

テキスト3およびそれ以降においても「解体」という言葉は使われていたが、そこではその概念について説明するような文章はなく、すでに読者に対して自明のボキャブラリーとして用いる記述が見られた。

考 察

(1) 「解体」の生成と対象の変化

1962年の文章「現代都市における空間の性格」の中でイソザキは、「いま」空間概念が大きく変わりつつあると指摘し、その状況を説明するものとして、1950年ごろ絵画の世界で起きた事件として、ジャクソン・ポロックのドリッピングの技法があったことを紹介し、それが都市空間の中で起きていることを説明する際のよい参照事例になると述べている。絵画と都市の解体についての文章は1962年という今回調査対象の中では初期のころに提示されている。表1の整理番号1の

引用を見ると、ここでの絵画における空間の問題は「(建築の空間においても十分に適応できると考えられる)」と述べている。これは() (=かっこ)の中に収められている。そのため、仮説として提示しているような印象を受ける。そこでは建築における解体について具体的には述べていない。表1の整理番号2では、「解体し分解した建築を…」の表現が見られるが、ここでは「都市を解体・分解したときに出現する建築という構成要素」について言及しているようである。

また、1962年の「都市デザインの手法」という文章の中の、表1の整理番号3として引用した文章の直前では、「現代とは、あらゆる総合への意図が、それが達成されたかに見える瞬間に、すでに混沌たる全体の単なる構成微粒子に転落するという、不定形が不定形を再生産しながら、すべての固定化した論理を融解しながら運動する時代である。」と、時代の特徴的意識について述べている。これには例証は伴っておらず、あたかも自明であるかのように述べ、「それゆえに」、「私たちのあらゆる企画」も、「都市デザイン」も解体が起こりうると演繹的な叙述を行っている。この包括的記述は、都市デザインの手法を具体的に述べる前の導入部として記されており、この後の文章では都市デザイン(都市計画から建築の計画概念を含める)の方法概念としての実体論的段階、機能論的段階、構造論的段階、象徴的敵段階の4つを詳述する文章が続いていく。今回の調査範囲内においては、表1の整理番号11, 12, 16に建築を対象とする解体の記述が見られる。整理番号11と16は建築の概念的な解体について語っているようだ。整理番号12は建築の物理的な解体のことを述べているようである。このことから1968年から、イソザキの文章には建築を解体の対象として捉え始める兆候がみられる。イソザキはこの時期に自ら「都市からの撤退」を宣言する¹⁾が、それは今回の調査で建築を解体の対象とする記述が見られる時期と一致する。ただし本論で引用した記述においては、建築の解体についての具体的な像は描かれていない。この頃イソザキに起こっていた出来事として、1967年には、エキスポ'70お祭り広場の基本構想と諸装置の企画をはじめ。1968年の5月には、第14回ミラノ・トリエンナーレの出展のためにミラノに滞在している。そこで、出展会場そのものがバリの五月革命の影響を受け、学生や若い芸術家たちに占拠されてしまった。これらの経験はイソザキに大きな衝撃を与えた。そしてミラノ・トリエンナーレで出会った建築家が、『美術手帖』の連載記事「建築の解体」の中でイソザキが紹介する7件の海外建築家の仕事のうちの3件となる²⁾。「建築の解体」それ自身が何であったかについて土居は、イソザキ自身が主題の不在を一時的に認めたこと、そして「すべてが建築である」というハンス・ホラインの宣言に同意することの宣言であるという³⁾。ただし本論はこのテーマを詳しく取り上げることを目的としていない。

表2は、テキスト1において「解体」という言葉に類似する言葉を整理したものである。〔使われ方の違い1〕は、語尾に「する」をつけた場合に他動詞を構成する名詞である。用法としては、目的語を付加して

「??を○○する。」のように用いることができる。〔使われ方の違い2〕は、語尾に「する」をつけた場合に自動詞を構成する名詞で、用法としては「??が○○する」のように用いることが出来る。〔使われ方の違い3〕は状態を示す名詞であり、動詞そのものとして使うよりは、「○○を迎える。」のように用いることができる。ここで抽出されている言葉は、「破壊」「消滅」「破局」など、「解体」という言葉とかなり類似したニュアンスを持つ言葉である。つまり、解体という言葉だけが、単独でイソザキの文中に突如として現れたというようなものではなく、このような意味合いを持つ別の言葉も彼の問題意識を表現するために活用されているということである。上で見た語法の検討から分かるように、これらの語群はニュアンスが異なるだけでなく文中に実際に用いるときに異なった使用のされ方をするものである。このことは、単一の使用のされ方をする言葉だけでは物足りず、類似する言葉を次々と発掘しようとするイソザキの意欲を示していると思われる。

(2) 「建築の解体」の成果

テキスト2においては表4に示したような文脈で「解体」という言葉が用いられていた。テキスト2(=単行本「建築の解体」)に取り上げられている文章のオリジナル原稿は、1969年12月から1973年11月までに雑誌『美術手帖』に10回にわたって連載されたイソザキの文章がもとになっている。前半部は1969年12月から1971年10月にかけての7回分の掲載記事で、イソザキが「建築の解体」を実践していると考えた海外建築家7人(ハンス・ホライン、アーキグラム、チャールス・ムーア、セドリック・プライス、クリストファー・アレグザンダー、ロバート・ベンチューリ、スーパースタジオ/アーキズーム)の作品とその思想を紹介したものである。後半部は、「《建築の解体》症候群」と題され、前半の各建築家の紹介記事を総括した内容になっている。後半部は雑誌『美術手帖』に1973年8月から1973年11月の間に書いた3回の記事をもとにしたものだが、テキスト2の単行本として出版する際には図版を大幅に入れ替えた。さらにすでに雑誌『美術手帖』で書いた海外建築家活動・作品の紹介記事とは別に、イソザキが新たに註の文章を書き入れた。雑誌『美術手帖』の連載記事名である「建築の解体」というタイトルは当時の雑誌『美術手帖』の編集長の宮澤壯佳氏の命名によるものである⁴⁾。この「建築の解体」においては、表5に示すボキャブラリーを抽出できた。

さて総括部分である「《建築の解体》症候群」には、「私にとって60年代が残したものは何であったか、という総括をせまられることになる」として、イソザキが建築界における当時の傾向をキーワードにまとめて提示した言語群がある。イソザキは、それらはどのようなもの(他の言葉?)で置換してもかまわない、それほど不確定なものだとして⁵⁾、(1) アパシイ apathy, (2) アイリアン alien, (3) アドホック ad-hoc, (4) アンビグイティー ambiguity, (5) アブセンス absenceなどの言語群をあげている。しかし、どのようなもので置換してもかまわないといいつつも、ここであげたキ

ワードのうちの最初の4つについては節を設けて、より詳しく具体的な建築家の仕事を紹介し力が入った解説を行っている。また最後のアブセンスとは何かといえ、もはや建築において主題は不在（アブセンス）になったという認識であるが、後年のイソザキの述懐によればアブセンスについては、当時の状況を示すキーワードとして大切なものであったと考えているように見える⁶⁾。

次に表5に抽出した言語群がその後イソザキにとってどのような関係を持ち得たのかをテキスト3で調査することにした。

テキスト3「手法が」には、磯崎が住宅設計のコンペ「わがスーパースターたちのいえ」（1975）の出題者、審査委員になったときの課題内容や講評が書かれている。そこで、そのコンペで磯崎が何を評価し、何を評価しなかったかの基準となった考え方が説明されている。その説明の中に表5で抽出したボキャブラリーが見つかった。そのコンペ評を抜粋すると、

肯定的評価となったもの

「死者を死者として選び出すことがそのままアイロニーに」可 (p. 139. L4)

「わずかにユーモアにあふれた表現をもちえている。」可 (p. 144. L4)

否定的評価となったもの

「あまりに直訳的になされているため、デュシャンのパロディーというにはいささか手軽すぎる。」不可 (p. 142. L20)

「パロディーにもパラドックスにもならない…」不可 (p. 143. L10)

の通りとなる。「建築の解体」で外国人建築家の作品を紹介した時に文中に持ち込まれたボキャブラリーは、2~6年後に、こんどは自分が他者の作品を批評する際のポイントとして用いられている。以上は1975年のコンペの講評であるが、テキスト3の中に収められた文章の中の、1972年1月にかかれた文章「なぜ手法なのか」においても、表5のボキャブラリーである「アイロニー、ユーモア、パラドックス、パロディー、ユーモラス」が見られる。これらのボキャブラリーは、表5に示したように「建築の解体」において外国建築家の活動・作品を紹介する記事の中でイソザキが用いたボキャブラリーであった。またここでは、それ以前のイソザキの問題意識、つまりテキスト1に現れた都市の様態から感得した視点、すなわち、完成したとたんに解体の契機を有するのだ（表1整理番号3参照）、確立したものなどない、いやありえないと感じていたこと⁷⁾と比べると、少々異質な感じがするポイントが講評内容に現れている。それは、否定的評価として

「すべてが埋葬されているために、崩れようがない」(p. 151. L7)

と述べている箇所である。これは作品のマイナスポイントとして記述されている。

これらのことを踏まえて考察すると、「建築の解体」において海外建築家の活動・作品紹介をしたあと、イソザキ自身があえて抽出した、アパシイ apathy, アイリアン alien, アドホック ad-hoc, アンビグイティー ambiguity, などの総括概念は、その後あまりイソザキ

の建築ボキャブラリーとして確認できないのに対し、むしろ海外建築家の活動・作品描写のために「建築の解体」文中でさりげなく用いていた、アイロニー、ブラックユーモア、パロディ、パラドックス、ジョーク、ナンセンスなどの言語が、実際にのちに活用されていたものであることが分かる。そこから推察することができるのは「建築の解体」の成果としてイソザキは「主題の不在」を発見しただけではなく、むしろこうしたボキャブラリーという彼自身にとって有用なテーマの発見をしたということである。この仮説をもってあらためてテキスト1を再読してみると、アイロニーという言葉とユーモラスという言葉がそれぞれ1箇所ずつ見つかった⁸⁾。しかし、本論で述べたように1968年以前は彼の関心は建築へと焦点を絞ったものにはなっていないために、前後の文脈からみてそれが建築のボキャブラリーとしての認識であったように見ることはできない。

1985年にニューヨークでイソザキの展覧会があったとき、カタログには以下のような文章があった。

“For the first twenty years of my career as a professional architect, I believed that architecture could only be accomplished by irony.

……

After twenty years of practical experience, I am now going to find a method to create architecture without irony.⁹⁾”

そこには、アイロニー、ユーモア、パラドックスなどの英単語が示されている。この叙述が本当であるとすれば、「建築の解体」はやはり主題の不在ではなく、むしろイソザキにおいては主題の発見に貢献したものであったといえる。

表5で抽出したカタカナ用語は、上の英文においては英単語として表現されている。日本語にはカタカナという、外国の言葉をそのまま表音文字として置換することができる特別の媒体があるので、英単語をカタカナにすると、英語で書かれていた概念を日本語の中にスムーズに持ち込むことができる。そうした日本語の機能を使って、ボキャブラリーを日本に輸入することで日本国内向けには新しい概念を提示することができる。そしてそれらの概念を使って実作品を作っていく、バリエーションの蓄積がなされた後でそれを海外で説明するときには、国内向けにカタカナで説明していたことを英単語で表現すればよい。日本特有の概念を用いて建築をつくったならば、文化的背景から説き起こした説明をしなければならぬことが起こりうるのと比べれば、ユニバーサルな共通認識に短絡しやすい措置である。そこには文化の境界を行き来する者として獲得した巧みな身のこなしがうかがわれるのではないか。

結 論

今回の調査、考察の範囲内から明らかになった点は以下の通りである。

(1) イソザキは「建築の解体」という単行本を出版したが、最初から彼の関心が建築を解体することにあつたというわけではない。彼は、まず近代美術や都市のあり方の中に、「解体」という現象があることを発見した。そしてそれを都市デザインの方法論として用いようとした。しかし、1968年ごろからそうして発見した概念を、建築のありようやあるべき姿を表現するときの言葉として用いるように関心の方向性を変化させている。1968年ごろとは、ちょうどイソザキが都市からの撤退を宣言した時期と一致する。ただし、1968年にメディアに登場した言説からは、それまで都市の解体という事象に向けられていた関心がわずかに建築の方を向くといった微かな変化の兆候が見られるだけである。

(2) 単行本「建築の解体」は、雑誌『美術手帖』の連載記事「建築の解体」(1969年12月~1973年11月までの全10回の連載)を収録したものである。その連載記事のタイトル「建築の解体」は、イソザキが自ら考案したものではなく編集者が決めたタイトルであった。執筆依頼をうけてイソザキが執筆した内容は、海外建築家の新しい活動の紹介であった。その紹介の総括としてイソザキがあえて取り上げたのは、アパシイ apathy, アイリアン alien, アドホック ad-hoc, アンビグイティー ambiguity, アブセンス absenceなどの概念であった。これらのうちアブセンス以外はその後再度取り上げられるものは少なかった。アブセンスにおいては、もう建築には主題はなくなったことが示唆された。一方連載記事「建築の解体」で特に総括の項目として彼が取り上げておらず文中でさりげなく使用していた概念として、アイロニー、ブラック・ユーモア、パロディー、パラドックス、ジョーク、ナンセンス、などがある。これらは、のちにイソザキが審査をしたコンペの講評などにおけるボキャブラリーとして積極的に利用されている。つまり「建築の解体」は、彼自身がもはや主題がなくなったと述べていることとは裏腹に、海外建築家の活動・作品紹介を行うプロセスの中で、のちに使うことになるテーマを彼に発見させたものであり、それは彼にとって主題の発見であった。これら後者のボキャブラリーは、建築を解体するための具体的方法として明確に意味をなした。さらに1968年以前を振り返ってみると、これらのボキャブラリーはイソザキの言説にほとんど登場せず、登場したとしても建築に適用しうる有効な概念として提出されていなかったことが分かった。

要約

本論は、日本を代表する現代建築家として国際的な評価を得、また後進の建築家にも多大な影響を与えている磯崎新の建築コンセプトの一つを取り上げる。特に彼が作家としての活動を始めた比較的初期の頃に社会に言論活動として問いかけた書籍「建築の解体」について分析する。この概念を1960~1970年代半ばにお

いて磯崎がどのような経過をたどって展開したのかを明らかにすることを目的とする。そのために鹿島出版会から出版された3冊の書籍、「空間へ」、「建築の解体」、「手法が」を主テキストとして調査を行った。調査は「解体」という言葉、その類義語、新しく登場する概念的な言葉などを抽出しながら、それらの言葉が登場する前後の文脈やその時間を整理してまとめた。

その結果、イソザキは最初から建築の解体を意図していたわけではなく、近代絵画や都市の様態を的確に把握するためのボキャブラリーとして「解体」という語を使い、その後都市デザインの方法論に援用しようとしていた。そのような中、1968年ごろから建築を解体の対象とし始めた。書籍「建築の解体」においては、海外建築家の紹介をする中で解体のための具体的概念としてアイロニー、ブラック・ユーモア、パロディー、ナンセンスなどのボキャブラリーを発見している。これらは後の彼の価値基準になった。

謝辞

本論作成において一部で南九州大学学園奨励費を使用したことを記して謝意を表します。

注記

- 1) これをイソザキ自身は「都市からの撤退」と表現している。磯崎新・土居義岳：対論 建築と時間、岩波書店、pp.76-77 (2001)。
- 2) アーキグラムのメンバー (ピーター・クック)、アーキズーム、スーパースタジオ、ハンス・ホラインら。磯崎新：建築の解体、鹿島出版会、p. iv、pp. 79-81 (1997)。
- 3) 前掲書 1) p.186 (2001)。
- 4) 前掲書 2) p.400 (1997)。
- 5) 「たまたま「a」の項にあるもの限定しただけで、どのようなもので置換してもかまわないわけだ。それほど不確定なものである。」前掲書2) P.301
- 6) はじめの4つのキーワードについては、節を分けてかなり具体的に記述しているが、最後のキーワードのアブセンスについては詳述していない。これらのキーワード、「アブセンス」(=主題の不在)についてイソザキが後年語ったものとしては、
「こんな時期に可能なことは？それが『建築の解体』をかいた時に末尾で自問したことでした。『主題の不在』という主題が、私なりの解答で、もはや建築が内包している形式にたてこもる他にないじゃないか。…建築を形式性として徹底した閉鎖系に閉じこめる。もちろん建築家たる私はその閉鎖系に閉じこめられてしまうが、それしか選択のしようがない。」磯崎新・土居義岳：対論/建築と時間、岩波書店、p.77 (2001)。
「主題が不在になったことにあらためて主題と

して向き合わねばなるまいと記すことができるようになったのは、70年代も中期になって60年代の全世界に多発したラディカリズムのサーベイをやった『建築の解体』の末尾においてである。」磯崎新：反回想 I, GA p.55 (2001)。

ということであった。しかし、土居はこれを文字通りには受け取っていない。その点において本論と類似した立場であろう。土居は「中心は空洞だが、それに向かい合うことは避けられない。つまりやはりそれでも建築をめざすのである」とし、その例として「主題がないのに主題を出す」としてコンペ「わがスーパースターたちのいえ」で、「最大のコンペ批判を最優秀賞にするところに磯崎の凄味がある」としている。しかし、その主題が何であるかについては土居は具体的に提示はしていない。

- 7) 「現代とは、あらゆる総合への意図が、それが達成されたかにみえた瞬間に、すでに混沌たる全体の単なる構成微粒子へ転落するという、不定形が不定形を再生産しながら、すべての固定化した論理を融解しながら運動する時代である。」この記述は、表1整理番号3の引用箇所の直前の段落に書かれている。磯崎新：空間へ、鹿島出版会、p.88、(1997)。
- 8) 一つ目は、ニューヨークという街を観察して描写している文章の中で、ポップ・アートと都市空間の関係について言及しているところで、「そのドキュメントを克明に作製すると、とたんにアイロニーになるという転換がポップ・アートに発見できる。」という記述。二つ目は、世界のまち、としてイタリアのサン・ジミアーノについて記述描写している際に、マンハッタンとの比較を論じて「こう考えると、現代都市の広告塔の乱立も、マンハッタンの堆積も笑えなくなってくる。いつの時代もかわらぬ虚栄のユーモラスな表出なのだ。」という記述である。
- 9) さらに引用すると以下の通りである。アイロニー、ユーモア、パラドックスなどの言葉が見られる。(下線は筆者。)
- “For the first twenty years of my career as a professional architect, I believed that architecture could only be accomplished by irony.
It could allude to treason.

It made it possible to create architecture as criticism.
It could admire the vulgar against noble, the secular against the sacred, without shame.
…

It was an unfinished wish, a mourning for what was lost—Hiroshima, holocaust.
To bridge over the gap—
A style of wit, a sense of humor and paradox were adapted.
…

After twenty years of practical experience, I am now going to find a method to create architecture without irony”.

ここでの引用は、David B. Stewart: Gods and Men, ARATA ISOZAKI, RIZZOLI, New York (1991), p.9より行った。原典は、Isozaki, “Architecture With or Without Irony” In *New Public Architecture: Recent Project by Fumihiko Maki and Arata Isozaki* (catalogue). New York: Japan Society, (1985) である。

引用文献

- 磯崎新：空間へ、鹿島出版会 (1997)。
磯崎新：建築の解体、鹿島出版会 (1997)。
磯崎新：手法が、鹿島出版会 (1997)。
磯崎新：「建築の解体」の連載記事10回分。(「美術手帖」, 1969年12月~1973年11月)。
磯崎新：反回想 I, GA p.55 (2001)。
磯崎新・土居義岳：対論／建築と時間、岩波書店 (2001)。
ARATA ISOZAKI, RIZZOLI, New York (1991)。

参考文献

- 磯崎新：見立ての手法、鹿島出版会 (1990)。
磯崎新：イメージゲーム、鹿島出版会 (1990)。
磯崎新：始源のもどき、鹿島出版会 (1996)。
磯崎新：造物主義論、鹿島出版会 (1996)。
磯崎新作品集第1巻1959-1978, A.D.A.EDITA (1991)。
磯崎新：建築家捜し、岩波現代文庫 (2005)。
磯崎新：jA 12 (冬) (1994)。
淵上正幸：世界の建築家—思想と作品、彰国社 (1996)。